フルマノワ・ポリナさんにうかがいました

京都大学への留学経験のあるポリナさんは、当時の指導教員らの支援を受けて日本に避難し、短期交流学生を経て、2022年 9 月から留学生ラウンジ「きずな」のスタッフとして京都大学が受け入れているウクライナ学生のサポートにあたっています。
そんなポリナさんに、今に至る経緯やきずなでの仕事について、日本や京都大学におけるウクライナからの避難者への支援に対する思いなどをお聞きしました。

（インタビュー：2023 年 2 月）

友人感覚で気軽に相談できるような
サポートを心がけています

高校生で日本語の勉強を始めた時、周囲が苦戦しているのに対して、私はすんなりと理解ができて、「自分に合う」と感じていました。それでキーウ国立大学では日本語学科を専攻し、3 回生の時に休学して、2019 年 10 月から 1 年間、文部科学省国費留学生として、京都大学日本語・日本文化研修プログラム（以下、日研プログラム）に参加しました。

大学によってプログラムの内容はさまざまですが、京都大学は研究が重視されていて、修了にあたっては論文を提出しなければなりません。ウクライナの大学では 2 年生の時から期末論文を書きますが、当時はそれほど楽しいと思えませんでした。それなのに、京都大学で研究し論文を書くことがおもしろくて、研究者の道を意識するようになりました。論文を「日本語でわかりやすく書く」ことをつねに考えていたことが、自分の理解を深めてくれたように思います。

修学旅行などのイベントもあって充実した留学生生活を送っていましたが、後半の半年間は新型コロナによって授業はオンラインに。友人とも会うことができず、メンタル面ではつらいことも多かったです。

それでもなんとか修了研究論文を仕上げて帰国。卒業に向けて準備しているところにウクライナでの戦争に巻き込まれました。

2022 年 4 月、ポーランド経由で日本に避難できたのは、日研プログラムの指導教員だっ

たパリハワダナ・ルチラ先生（国際高等教育院 附属日本語・日本文化教育センター 教授）から日本でも避難民を受け入れると連絡をいただき、多くの方に支援いただいたおかげです。当時はまだキーウ国立大学に在学中だったので、京都大学国際高等教育院の短期交流学生として 6 月まで受け入れていただきました。

キーウ大学の授業もオンラインで受けながら卒業論文を作成し、無事 6 月に卒業。8〜9 月には大学院の入試があり、避難してからの半年間は研究や論文執筆に追われる日々でした。

院試にもなんとか合格でき、2023 年 4 月の入学までの間、私の経験を活かしてウクライナ学生や交換留学生のサポートをしてほしいとお声がけいただき、留学生や日本人、教職員との交流スペースである「きずな」のスタッフとして働くことになりました。ここで、図書の貸出や各種登録作業のサポート、相談対応のほか、ウクライナ学生との面談を月 1 回行っています。

学生たちから、「わかりやすい日本語学習のテキストを教えてほしい」といった質問をされたり、複数の学生と雑談したりすることも。

サポートにあたっては、私自身、皆とそれほど年齢が違わないこともあり、友人のように気軽に話しかけられるような雰囲気づくりや接し方を心がけています。1〜2 回生の学生や、一人暮らしが初めての学生もいますし、どんなささいなことでも話してもらえるようにできれば、と。

でも、実際の面談で話題にのぼるのは、悩み事などではなく、この 1 カ月で経験した楽しかったこと、おもしろかったことなど、ごく日常の出来事ばかり。自然体で、ほかの学生と同じようにエンジョイしながら生き生きと学生生活を送っていることがうかがえて、とてもうれしく思っています。

ほとんどの学生はキーウの大学に在籍しており、向こうの大学の授業や試験も受けながらなので、皆、忙しそうにしています。最初は英語の授業に苦労していた子たちも、今ではすっかり慣れた様子です。

まだまだ進路を考えられない学生もいれば、希望する進路はあってもなかなか思うようにいかない学生もいます。日本語を専攻していて、私の進路に興味を持って質問してくる学生もいます。先が見通せない中で、いろいろな選択肢があることを知ってもらえるといいですね。

日本政府や各財団などによるウクライナ支援は本当にありがたいと思っています。正直なところ、日本からこれほどの支援をいただけるとは考えていませんでした。ウクライナ人にとって、やはり日本は“遠い国”。良いイメージは持っていますが、日本への留学経験があると言うと驚かれるくらいですから。

京都大学のウクライナ学生受け入れの取り組みにも感謝しています。彼ら彼女らが安心して学びを続けられるように、これからも支援を継続いただけることを願っています。

今後について

ポリナさんは、2023 年 4 月から東京の大学院に進学し、認知言語学の研究に取り組まれる予定です。ウクライナではまだ数が少ないという日本語を認知言語学の観点から考える分野で研究を進め、将来は博士課程に進学して研究者になりたいという今後の目標と、ウクライナでも日本語における認知言語学という分野を広め、「研究が楽しい」と思える環境づくりに貢献したいという思いを伝えてくださいました。

（終）